



特集▼1

子どものための 環境教育を考える 水・空気・緑・そして子ども

21世紀がスタートして、はや数年が経過しました。21世紀は様々な期待と不安が錯綜した世紀であると言われていましたが、情報に関する目覚ましい進化、経済・政治・文化などの国境を越えたグローバル化、環境問題のさらなる深刻化、そして人類にとって最悪のシナリオである国際戦争まで、この僅かな期間に起きたいくつかの出来事を考えてみても、不安に傾いた錯綜の様子をすぐに確認することができます。こうした現実を目にする時、人類に未来はあるのか?といった素朴な疑問が湧いてくるのです。

本特集は21世紀の大きな課題の一つである環境問題に目を向けています。しかも、人類の未来に繋げるということで、子どものため、子どもたちと一緒に:といった視点を大切にしながら考えを進めてみたいと思います。

1. 20世紀から21世紀へ: 環境問題の顕在化と環境教育

大澤 力 / おおさわ・ちから
東京家政大学助教授

20世紀後半、世界の先進国では工業化が大きく進展しました。我が母国・日本でも、高

度経済成長の激しかった1960～1970年代潮干狩りのできる海は埋め立てられ、工場建設の割安な土地として提供されていきました。そして、潮干狩りのために残してほしいという一部の人たちの声は一笑に付されてしまいました。工業による生産こそが、日本の繁栄をもたらすと堅く信じられていたからなのです。一方、野山も住宅地やレジャー施設へと大きく姿を変えていきました。工業化により生み出された資産は、海から野山へと拡散し、自然を容赦ない大規模開発が襲っていききました。

しかし、時が経るに従い、工業最優先がもたらした人類への贈り物は、水、空気、緑さらに大地までも激しく汚染し尽くすといった信じられないような現実でした。それはついに、ある地域では人類の生存すらも脅かすといった由々しき状況にまでたちいたってしまったのです。

こうした危機的な状況の中で、自然保護運動が認知されていきました。はじめは、遠くの大自然を残すことから出発し、やがて足元

のごく身近な自然を守り育てること、さらに日常生活を再点検して地球にやさしい……自然な生き方を大切にするといった人生の価値観にまで及び始めているのです。人類として、地球に生きる生物の仲間との共生や共存といった……より望ましい生き方の模索といった行動へと進展してきています。

環境教育とは、この「人類として、地球に生きる生物の仲間との共生や共存といった……より望ましい生き方」に価値を見出し、それを身につけ、実践していく教育なのです。

子どもにとって、

2. 人類にとつて望ましい 環境教育の中身とは？

まず、子どもにとつて望ましい環境教育の中身を考えてみます。そのヒントは、沼田眞氏（日本の環境教育の基礎を創った人物）が自著『環境教育論』で述べている「幼児や小学生の段階での環境教育は、基礎的な自然観察、自然誌教育が最も重要である」という一文の中にあります。「自然誌」とは（ナチュラ

ル・ヒストリー」といい、自然科学・生物学・生態学の源流にあたる、より総合的な自然科学のことです。ポイントは、単に自然というのではなく、「自然とのかかわり」にあるのです。

さらに、幼児期の自然とのかかわりに考えを絞り込んでいく時、山内昭道氏（日本の幼児期自然教育の代表的な実践研究者）が、自著『幼児の自然教育論』で「生きているものは、幼児たちのまわりにある自然の中で、最も親しみやすく、最も身近なもの」、「幼児の自然教育の内容として、最も多いものは、動物と植物とのふれあいを中心にした活動である」といった言葉に着目する必要があります。幼い子どもたちにとつての環境教育では、身近な生き物……特に、「動物や植物とのかかわり」が重要な中身となってくるのです。

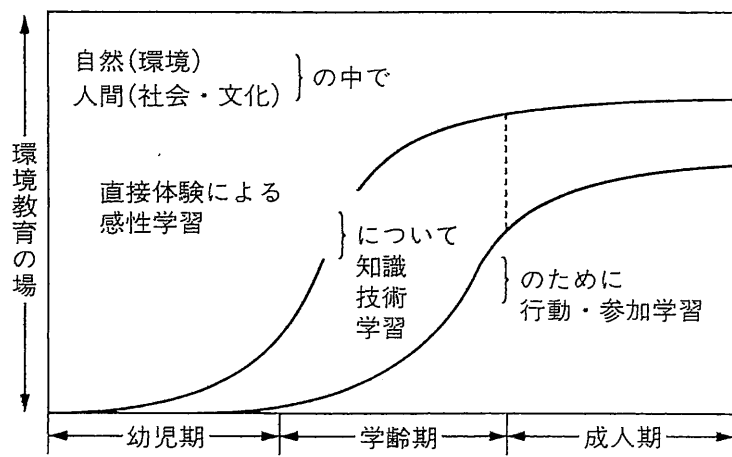
次に、身近な生きもののかかわりによって子どもたちによつたい何が育つのかを探ってみましょう。それは、農業汚染をテーマに取り上げた著書『沈黙の春』で、環境問題に關して世界的に警鐘を鳴り響かせ、20世紀に

最も貢献した人物の一人にも挙げられているレイチェル・カーソンの言う「センス・オブ・ワンダー（自然のもつ神秘さや不思議さに目を見はる感性）」が育まれていくのです。

このセンス・オブ・ワンダーは、「やがて大人になるとやってくる倦怠と幻滅、私たちが自然という力の源泉から遠ざかること、つまらない人工的なものに夢中になることなど」に對する、変わらぬ解毒剤になる」とレイチェルは言うのです。自然に對する豊かな感受性と人間として生きることに、まさに幼児期に身につけたものが、その人の一生に大きな影響を与えていくのです。環境教育の基盤は、自然と人間に對する深い愛情から成り立っている……というのが子どもにとつても、人類にとつても望ましい環境教育の本質なのです。

また、こうしたことにより環境教育は、生涯学習としても位置づけることができます。

「生涯学習としての環境教育」は、より多くの人々の共感をよぶことでもあり、人類にとつてさらに望ましい環境教育の中身に通じるものなのです。自然と人間という二つの学



習対象に、幼児期・学齢期・成人期といった三つのライフ・ステージと、直接体験による感性学習、学校で学ぶ知識・技術学習、問題解決のための行動・参加学習といった三つの環境教育の場が設定できます。そして、これら三つの環境教育の場は、人間(文化・社会環境)と自然(自然環境)との両者に対し、(〜の中で)・(〜について)・(〜のために)の環境教育として表現することができるのです。幼児期・学齢期・成人期のいずれにおいても、これら三つの場が設定されることが必要なのですが、学習者の発達段階に応じて各ライフ・ステージで強調される内容は異なるのです。幼児期では感性学習、学齢期では知識・技術学習、成人期では行動・参加学習が、主要な環境教育の中身となります。

3. 子どものための環境教育実践・ビオトープづくりから始まるものはなに?

これまで述べてきたように自然や人間とかわかることを通して、より望ましい方向へと子どもたちの心身は成長発達を上げていきます。しかし、ここで先ほど登場したレイチェルが言っている別の言葉に耳を傾けてほしいのです。「生まれつきそなわっている子ども(センス・オブ・ワンダー)をいつも新鮮に保ち続けるためには、わたしたちが住んでいる世界の喜び、感激、神秘などを子どもとつしよに再発見し、感動を分かち合っていく大人が、少なくともひとり、そばに必要があるので」といった言葉です。子どもと大人が共に身近な自然や地域社会を通してかかわり合うことが環境教育には、是非とも必要なことなのです。

こうした内容を広く・深く取り込める方法として、近年、注目を集めているのが「ビオトープ(Biotope)」を作り育てていく

活動です。

ビオトープの学問的な意味は、「生物が生息できうる、まとまりをもった場」ということなのですが、ドイツが発祥であり、壊された自然環境を元に戻す復元活動を実践する際に誕生したとされる考え方なのです。

ビオトープは、その特徴を示す①生物多用途の視点・②広域ネットワークの視点・③環境復元・創造の視点といった三つの要素から成り立っています。ビオトープが多く場所で作られ育てられていくことによって、その先はどのようなようになっていくのでしょうか？それは一つひとつの小さなビオトープが持っている、地域における自然環境と社会環境から出発していき、三つの要素からなるこれらの特徴が相乗的に発展して、世界全体をより包括的、かつ緊密に結びつけた姿へと発展していくのです。

このことを表したキャッチ・フレーズが「Think globally・act locally」といった言葉です。ごく簡単に一言で表すと「地球市民」といった言葉に

なります。「思いは常に世界全体をとらえつつ、日常生活にしっかりと根ざして地域に生きる！」ということになるのです。それは、総論で最初に述べた環境教育の本質である「人類として、地球に生きる生物の仲間との共生や共存といった……より望ましい生き方」そのものことであり、そこに価値を見出し、それを身につけ、実践していく教育である環境教育のことなのです。

今後、ますます地球規模で多くの困難が襲ってくると思われれます。こうしたときにこそ、常に思いは地球や人類に対する、自然や人間に対する愛情に満ちあふれつつ、自分の人生にはしっかりと責任をもった自分らしい自分で精いっぱい生き抜ける。こうした人間に子どもたちが育っていつてくれることを願ってやみません。

21世紀……これからが、真の意味での「環境教育の価値」が問われる時代だと私は思います。